



浅間優太初個展である。浅間は1990年生まれ、東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻四年生に在学中だ。2014年からグループ展で作品を発表し始めた。その頃は反復をテーマにしていたが、今回は異なる展開となった。

《無用になりかけた存在》と題する50体のオブジェが、画廊の床と壁面に広がる。同じ形態は一つもなく、着色も施されていない。造形を問題とせず、機能を重視している訳でもない。かといって概念の強調もない。

浅間が吹いたガラス瓶を、板木が支えている。作品にとって重要なのは、板木が守るように囲うガラス瓶なのであろう。ガラス瓶は板木に、無造作に括り付けられている。何故そこまで、ガラス瓶は重要なのだろうか。

画廊事務所の展示空間に移ると、オブジェが様々な場所に置かれていた様子を示す写真が展示され、展示しきれない写真はファイルに収められている。浅間はオブジェを「支柱」と呼ぶ。

「支柱」は市街や道端、田圃や橋の下にまで設営されていたのだ。浅間に聞くと、自己の生活圏内で有効と思われる場所を日々探したという。目立たない場所もあれば、よく見えるからこそ気付きにくい場所もある。

浅間のコンセプトは、日常の風景を異化するのではなく「発見」にある。「支柱」はその装置なのである。

「支柱」は街中の人々にとって、アートであると認知されることはあるまい。「美術関係者」と自己を謳う者たちでさえも、そのコンセプトと存在価値を認める者は少ないであろう。撤去される場合も多々あったという。

浅間をはじめ、予めその場所のサイズを測り、大学で「支柱」を制作し、人目につかないよう素早く設営していたが、徐々にその場で制作するようになったという。この制作方法の変更は重要である。

なぜなら私には浅間の《無用になりかけた存在》は超芸術トマソンや、飯村昭彦の写真作品のコンセプトである《芸術状物質》とは異なる意味を見出すからだ。浅間の作品は時間を背負っていない。故に、「痕跡」にはなりえない。

「いま、ここ」を標榜する現代美術の思想において、アークワークスやパフォーマンスの「痕跡」は重要な役割を果たす。写真や映像のイメージが先行する場合も多々ある。それを利用することも有効であるのだ。

しかし池田龍雄の《梵天の塔》のように、「いま、ここ」を保持したまま権威的な「永劫」を放棄し、「いつか、どこか」という新たな着想を導き出す場合も存在する。浅間の現地での制作は、「いつか、どこか」に近い。

浅間は今後、自己の活動領域という場所、行為と経験という時間を越えて、美術と近代という怪物に向かってゆける。

